



2026. 10

漢方医学センター
班目 有加

～膣の痛み～

私は産婦人科医ですので、「膣の痛み」と対峙することがしばしばあります。膣の痛みの原因は大まかに分けると、感染と感染でないものに分けられます。感染性の膣痛に関しては、カンジダや細菌、淋菌やクラミジア、トリコモナスやヘルペスなどの原因に対して抗生剤や抗ウイルス薬を使用するわけでシンプルなのですが、感染性のものでない膣痛の治療はしばしば難渋します。

非感染性の膣痛にも色々ありますが、

・神経傷害性疼痛：外陰ヘルペス感染後に、治っているのに神経痛だけがピリピリと残っている状態や、出産後に傷は綺麗に治っているのにビリビリと痛みが残っている状態など

・Genitourinary Syndrome of Menopause (GSM：閉経関連泌尿生殖器症候群)：エストロゲン（女性ホルモン）の低下が原因で、膣上皮の菲薄化や、膣分泌・潤滑低下、pH上昇・膣内環境変化によって、膣粘膜脆弱化や微小な損傷がおき、乾燥・灼熱感・疼痛・性交痛といった症状につながるもの

・vulvodynia（外陰痛症）：見た目上は何も問題なく、明らかな原因疾患では説明できない慢性外陰部痛

といった、なかなか一筋縄に行かない状態が起こっている時、漢方的なアプローチが良い場合があります。

陰部ヘルペスの後に神経性疼痛が残ってしまう場合や、会陰切開部の瘢痕部分に神経痛が残ってしまう場合などは末梢神経疼痛に使用する薬を使用しつつ、神経の過敏性を抑えることを目的として釣藤鈎が入っている抑肝散や、加えて桂枝茯苓丸など痛み使用する漢方薬を使います。

G S Mに対しては女性ホルモンの補充、潤滑剤や保湿剤の使用が基本的には推奨されており、レーザー治療も考慮されますが、なかなかすっきりと改善されない事も多く、そんなときは漢方薬を併用します。

更年期においては補血と活血（当帰芍薬散、四物湯、桂枝茯苓丸など）、加齢に対しては補腎（八味地黄丸、六味丸など）、潤いが無い症例には滋陰剤といって潤いを加えるような生薬を多く使った漢方（六味丸、滋陰至宝湯、滋陰降火湯など）を使います。

裏面に続く

原因に対してのアプローチでも改善しなかったり、原因がわからないような痛みを訴える患者さんは、漢方的な診察で詳しく問診を取ると、単純な話ではなく社会的背景を含む多くの問題を抱えていたりします。

年齢的にも、様々な責任や義務感が押し寄せている世代です。

漢方では、慢性のストレスが疼痛となって表現されることがあり、こういったときにはストレスを和らげる柴胡や芍薬などを含む漢方（加味逍遙散、滋陰至宝湯、柴胡桂枝湯、四逆散）を使用することもあります。

イライラがあれば抑肝散や、不安が強ければ加味帰脾湯も考慮します。

慢性化してこじれているようであれば桂枝茯苓丸などで血の巡りをよくします。

なかなか人に言いづらい膪という部分に痛みを抱える方は、我慢強く、ストレスを飲み込んで頑張ってしまうかたが多い印象です。

ただでさえ年齢でひりひりを感じているところにストレスと過労が重なり増強されてしまう。難儀なことに、ご本人の自覚として、ストレスを感じていることすら気づいていない場合もあります。

しかしきけば壮絶な家族背景を背負っていたりする。そこをひもといてシンプルにすると良い方向に行く場合が多いと感じます。

問診が終わっただけで少し顔が晴れやかになる患者さんも多いです。

一般的な産婦人科では、感染性の膪痛に対する治療はよく行われますが、感染症が否定されると「何もなくて良かったですね」で終わってしまう場合が多いです。

相談しづらい部分であることは重々承知しておりますが、漢方的なアプローチで症状の改善を狙えることがありますので、是非一度ご相談ください。

＊コラム内に登場する処方是一例です。身体の不調サインや体質を加味して処方を行います。

漢方外来は**紹介制・予約制**です。当院におかかりの方は、各診療科の主治医に漢方外来への受診希望をお伝えください。